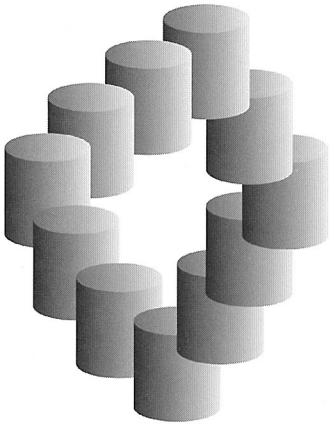
―だまし絵と錯視の違い

北岡明佳



不可能図形作品
「芯なし不可能ロール」

だまし絵というものがある。不可能図形、反転図形、絵なのに立体的に見える図形など、いろいろな種類がある。写真の発明以前は、本物のように見える絵、という意味であったようである。

だまし絵と錯視はよく混同される。そのため、錯視の研究者である私のところにだまし絵に関する質問が時々来る。そういう場合、だまし絵も知覚心理学が取り扱う領域なので、丁寧に回答するようにしているが、実際にはだまし絵と錯視は違うものである。どこが違うか一言でいうと、だまし絵は役に立つ視覚メカニズムを「誤用」したものであるが、錯視は役に立たないメカニズムそのものである。

図には、だまし絵の一種である不可能図形を示した。この図では、近くのロール同士は重なりによる奥行き知覚は整合しているが、全体として見ると不可能な配置となっている。物体の奥行きの順番には推移律が成立するはずだからである。

奥行き知覚における「重なり」の要因は、知覚のメカニズムとして機能的である。すなわち、実際の三次元世界を正しく知覚できるという点で、生存の役に立つ。だまし絵は、そのような役に立つ知覚を用いて、最終的に現実的でない全体像をつくり上げたものである。

錯視図形も現実的でない絵には違いない。しかし、錯視ではそれを構成する知覚の要素そのものが役に立たないのだ。すなわち、平行な線が平行でなく見えるとか、静止物が動いて見えることが生存の役に立つということはないだろう。

（きたおか・あきよし　知覚心理学）